

# 原発副読本

事務局 榎 正昭

原子力発電に対する理解を図る目的で、文部科学省と資源エネルギー庁（経済産業省）が全国の小中学校に配布した副読本の内容が、福島第一原発の事故により見直されることになった。この副読本は、文科省ホームページからダウンロードできるようになっていたが、事故の後は削除された。

問題になったのは、「もし地震が起きたとしても、放射性物質をあつかう原子炉などの重要な施設は、まわりに放射性物質がもれないよう、がんじょうに作り、守られています。」（小学校用）「大きな津波が遠くからおそってきたとしても、発電所の機能がそこなわれないよう設計しています。さらに、これらの設計は『想定されることよりもさらに十分な余裕を持つ』ようになされています。」（中学校用）などの記述。実際には、事故は起き、施設は破壊され、放射能漏れが続いている。文科省は、副読本を年度内にも改訂するようだ。

しかし私は、この副読本をそのまま修正せずに日本中の子どもたちに配って欲しいと思う。なぜなら、この「原発副読本」は、情報をただ鵜呑みにすることがいかに危険かを学べる教材になるからだ。この副読本の記述と、実際に起こった事実とを一つ一つ照らし合わせ、その違いと理由を詳細に検証することで、今回の事故の本質が見えてくるはずだ。その上で原発のメリットとデメリット、原発のある地域の立場と電気の供給を受ける側の立場、それらの情報を集めてどうしたらいいか自分の頭で考え、皆で話し合う。政府に対して「安全か危険かはっきり示して欲しい」と要求するだけでなく、自分で考えることのできる人間を育てるためには、そういう事実に基づいたリアルな学習をするべきだと思う。

JADECニュース83号（2011，5）より